

松本城周辺で出会えた、 豊かな路上空間



路上には、棚もある。果実がなる樹種であれば、芽吹き・新緑・つばみ・実り・紅葉の季節それぞれに、楽しみが豊かになる。

山下裕子 (広場ニスト／ひと・ネットワーククリエイター)

でかけた先では、まちなみを味わおうといつもたくさん歩く。看板の書体・飲食店の献立や匂い・軒先の設え・物の配置等にも、その町の文化は現れている。まちなみを感じる場所は、大抵路上である。路上には建物が建てられないから、見通しができる。そしてそれが、その町の魅力となる。先日訪問した松本では、住宅地からもお城の姿が垣間見えた。いや、多分、逆である。城への見通しが生まれるよう、道がひかれたのであろう。とある町では、お城が見える場所に皆が自宅を建てるがゆえにコンパクトシティ(寄り添い集まって暮らす)になったと聞く。いつもふれていたい風景が地元であり、自ずとシビックプライドが育まれる。理想的だ。松本にも、それを感じる。市街地にも湧く水は喉を潤し、大樹が木陰をつくり、辻ごとのそうした風景が律動を刻み、歩いて楽しい路上を形成している。その路上に、いま、うねりが起きている。歩行者優先であり、居場所づくりであり、これからの移動のしやすさである。これまでも郵便ポスト・消火栓・ゴミ収集等地域社会の基盤として活躍してきた路上。その空間構成や活用策が、あらためて問われている。

こしばらく、素朴であるが大切な「でかける」行為そのものを意識している。2040年には、3人に1人が高齢者(65歳以上)となり、しかも約4割が単身世帯となる個の時代。個を孤独に直結させないための地域社会の在り方が模索されている。若輩ながら歳を重ね実感するのは、待合わせや親睦会といった約束に対して億劫になっていく事実。そこで想うのは、自分がたくさん歩けなくなった際に、自宅からでかけたら自分の居場所があって、美しく楽しい眺めがあって、たまに気の合う顔見知りを通りかかり、たわいもない話に花が咲いて、喉が渴けばお茶をして、お腹が空けば美味しい軽食がいただける路上があれば、きっと心強いだらう。さらに空地増加を好機と捉え、ゆとりある路上周辺を“車種”ではなく“速度”で区分してみるのはどうだろうか。たとえば、生活道路(30km/h以下)内であっても5km/h(歩行等)・15km/h(自転車等)・30km/h(車両等)で区別し、互いの安全性と快適性を高める。それらが叶えば、自分自身の体調や気分や同行者や荷物の量や天候によってでかける場所と移動手段の両方を自由に選択できる豊かさが生まれる。でかけてひととふれあい心身ともに健やかに暮らし、たまに遠くまででかけられる元気を自分自身で持続できる。理想的だ。



街角の居場所には、時間帯によって多様な利用者がいるようだ。壁面のポスターに、その様子が垣間見える。

表紙：松本城北隣に鎮座する、松本神社前のケヤキのそばにある「松本神社前井戸」で水を汲む家族。

裏表紙：国宝旧開智学校のそばにある松本市立開智小学校隣接のバス停。向かいには松本幼稚園があり、木陰で園児の様子を眺めながらバスを待てる。



山下裕子 (やました・ゆうこ)

2007年よりグランドプラザ事務所勤務。2014年より個人活動開始。地域の広場づくりに地元の伴走者の立ち位置で活動中。著書に『にぎわいの場 富山グランドプラザ―稼働率100%の公共空間のつくり方』(学芸出版社)、『生きた景観マネジメント』(共著・鹿島出版会)、『コンパクトシティのアーバニズム』(共著・東京大学出版会)。